

☆演題☆

現代韓国社会とジェンダー

—韓国フェミニズム恋愛小説『僕の狂ったフェミ彼女』を読む

と き：2022年7月21日(木) 14:50～16:20
 場 所：滋賀県立大学交流センターホール
 対 象：学生・教職員
 講 師：ミン・ジヒョン氏(小説家・脚本家)、加藤慧氏(翻訳家)

近年韓国フェミニズム文学が注目を浴びる中、今年3月に日本語訳が出版された『僕の狂ったフェミ彼女』(イースト・プレス)はSNSを中心に大きな反響を呼んでいます。今回来日されたミン・ジヒョンさんを県大にお招きし、加藤慧さんとはオンラインでつなぎ、本書の内容や韓国におけるジェンダーをめぐる問題についてお話を伺いました。

今回はコロナ感染防止の制限のため学生・教職員が対象でしたが、参加者は160名程度となり、半数近くは小説を読んだ上で参加しました。この小説で初めてフェミニズムというものを知ったという学生も多く、自分自身のジェンダー観を見なおす機会となったようです。(木村可奈子)

対談

ミン・ジヒョン・加藤慧・木村可奈子
 現代韓国社会とジェンダー—韓国フェミニズム恋愛小説『僕の狂ったフェミ彼女』を読む
 今年翻訳出版されて大きな反響を呼んでいる韓国フェミニズム恋愛小説『僕の狂ったフェミ彼女』。作者のミン・ジヒョンさんと翻訳者の加藤慧さんが司会(木村)の大学時代の友人であった縁で今回の対談を企画した。

仕事に就いたきっかけと日本語訳の出版経緯

木村：今のお仕事をするようになった経緯をお話してもらってもよいでしょうか。

ミン：子供のころから本を読むのが好きだったので、作家という仕事は具体的に想像していなかったけれどクリエイティブな仕事ができたらいいなと思っていました。東北大学に交換留学した時に日本人学生と交流したくて映画製作サークルに入ったんですけど、そこで韓国の大学ではまだ撮ったことがなかった、人生最初の自主映画を日本のサークルで撮るようになって、それがすごく楽しくてクリエイティブな仕事って面白いかもと思い、帰国してか

ら芸術系大学の大学院に入学して映画の脚本の勉強をして…創作の勉強をして脚本を書きながら、今の仕事をやるようになりました。

加藤：もともと建築の勉強をしていたのですが、大学院の時に韓国に留学して韓国の建築史を勉強し、帰国してからアルバイトで韓国語を教える仕事をするようになり、韓国語自体の仕事にシフトするようになりました。今回がはじめての翻訳作品になります。

木村：(加藤さんに対して)ミンさんの本が出版された経緯を教えてください。

加藤：日本で読まればいいなと思っていたところ、ある編集者さんが書いた記事を読んでこの方なら興味を持っていただけそうだと思います、SNSで連絡をとりました。そうしたら幸い気に入って共感していただき、ぜひ出版しましょうとなりました、とんとん拍子で出版することができました。

(ミンさんにお話しを伺いながら、近年の韓国でのフェミニズムをめぐる動きについて木村が紹介。女性嫌悪に対抗するコミュニティサイト「メガリア」(2015年設立、2017年閉鎖)からフェミニズムが活発になり、江南(カンナム)駅付近女性殺人事件(2016年)からフェミニズム・リポートの時代に。本作に関わる墮胎罪をめぐる動きや、#Me too運動、不便な勇気デモ、スクール Me too、n 番部屋事件、そして今年行われた第22代韓国大統領選挙など。)

【『僕の狂ったフェミ彼女』あらすじ

主人公スンジュンは結婚相手を探しているが、4年前アメリカにインターンに行く際に別れることになった彼女が忘れられない。ある日墮胎罪廃止を訴えるデモに出くわす。全く関心がないスンジュンはこれが「メガル」¹かと、遠巻きに見ていたところ、そのひとりに追いかける。なんとその人物は4年前に別れた「彼女」だった。すっかりフェミ

ニズムに「狂って」しまった「彼女」をスンジュンはなんとか過去の「彼女」に戻そうとするのだが…】

作品への感想

木村：それでは作品内容に移りたいと思います。個人の感想をごく簡単に述べますと、一回目は勢いでばーっと面白く読んだのですが、主人公スンジュンにイライラしながら読みました。今日の準備のために読み返したときには、イライラし過ぎて読むのにすごく時間がかかりました。本の感想を寄せてくれた女子学生の感想にも『ドグラ・マグラ』並みに読むのに時間がかかったというものがありません。本当にいろんなジェンダートピックが織り交ぜられていて、まだ読んでいない方にとっても、読めばどういった 이슈があるのかすごく勉強になると思います。韓国社会と日本社会は違うところはありますが、似ているところも多いので、そういう点で良い気付きがあるのではないかなと思います。私の授業(朝鮮地域文化論)の学生さんに感想を提出してもらっており、そのほか何人かセミナー参加登録時に感想をくださった方がいますが、男女問わず「狂っている」のはスンジュンの方だ、という意見の方が多く、大変興味深かったです。スンジュンのような見方をしていますという男子学生の感想もありましたが、意外にも「スンジュンおかしいんじゃないの」と思う男子学生が多くて、強い言葉でスンジュンを非難する学生もいましたし、「彼女」を矯正しようとする姿勢に強い嫌悪感を示す学生もいました。男子学生側は、男性と女性に見える世界が違うということに初めて気づくということが多かったようでした。女性がいかに生きづらいかということの小説で追体験できた、勿論この作品は主人公は男性のスンジュンなので男性視点で話が進むわけですが、「彼女」との対話の中でいろんなものが見えてくるわけですね。それにいろいろな気付きを得たという男子学生は多かったと思います。女子学生はスンジュンにいら立つという感想が多かったです。「彼女」の苦しみはスンジュンには全くわからないので、伝わらないことへの諦念を書いてきた学生もいましたし、「彼女」の強さに勇気づけられた、という感想もありました。感想をミンさん、加藤さんに読んで

らっているのですが、例えば日韓での違いがあったとか、印象的な感想があったら伺ってもよろしいですか。

ミン：すべて素晴らしい感想を書いてくださっていて読みながら楽しかったです。たぶん韓国だとフェミニズムに対する一般女性、若い女性の関心がすごく高いので、自分がフェミニストであるという自覚をもってこれを読んでくださった方が多く、自分のことのように感じる、もしくはこのような経験自分にもある、といった反応が一番多かったんです。今回を含めて日本の読者の感想は、はじめてフェミニズムについて考えるようになった、彼女の強さに憧れる、というような感想で面白いと思います。この小説に描かれている保守的な価値観というか社会の雰囲気が、自分の周囲の雰囲気に似ている、という感想もあれば、今の日本はこんな雰囲気ではないのではないかという感想もありました。同じ社会でも、自分のいる環境によっては感じることは違うのかもしれない、という点も面白かったです。

加藤：ちょっと似ているのですが、自分の親戚とか親とかにも家長制的な考えを押し付けられるから、すごく共感できるという意見もあって、地域とか家庭環境によっていろんな意見があって印象的でした。先ほど男女の感想の違いというのがあったのですが、女子学生の感想の中にも気づきの感想があって、私が初めて読んだときに結構気づきがあったことを思い出して読みました。

作品執筆・翻訳の工夫

木村：物語に沿ってお話を伺いたいと思うのですが、その前にまず物語を構築する際の戦略について伺いたいと思います。主人公を男性にしたことが男子学生の読みやすさの一因となっていたと思いますし、「彼女」に名前を付けなかったこととか、いろいろ戦略的に構想したのだと思うのですが、そのあたりのことを聞かせてください。

ミン：韓国では社会的な雰囲気や『82年生まれ、キム・ジョン』のヒットがきっかけになってフェミニズム小説がすごく人気で、いろんなフェミニズム小説が出版されるようになりました。私自身もフェミニストとしてそういうテーマに興味がありましたし、自分も作家ですから、自分が感じている今の社会に対する問題点というか言いたいこ

とがあったので、どのような戦略で書けばいいのかとずっと悩んでいました。『82年生まれ、キム・ジョン』のように、自分の経験を女性の言語で書くということが一番多かったんですね。なぜかという、これまでの韓国小説はだいたい男性主人公の男性の話が多かったので、女性が自分の話を女性の言語ですするというのが最初のフェミニズム小説の流れの中ではすごく重要でした。そういった作品を私もずっと読んできて、それもいいと思うのですが、自分がフェミニストとして感じていた大きなつらさというのは、恋愛がすごくしにくくなるということでした。恋愛したら男女の役割、彼女はこうするべき、彼氏はこうするべきということが決まっていて、私たちの日常生活に家父長制が潜入していて、フェミニストとして自覚した自分には恋愛しづらくてすごく悩んでいました。そのような難しさ、つらさを小説にしたものはないのかなと探してみたのですが、最初のフェミニズムの 이슈として非婚主義とか非恋愛主義とか、いままで当然にされていた男性との家父長制の中でのロマンスを廃しよう、という話が多かったので、意外と男女の恋愛を描いた作品がなかったんです。それで恋愛の話をしようと思ったとき、女性側でどれだけそれがつらいかを書くのも意味はあるのですが、それだと今までの作品と変わらないなと思って。私がフェミニズムにちょっと反感を持っていた男性と付き合っていたとき、彼の反応がむかつくときも多かったのですが、むしろ「面白いな」と思うときが結構あって、そのアイロニーをブラックコメディとして描いたら、愉快ではないけど、意外と軽く読みながら考えられる作品になるかなと思いました。たとえば『猟奇的な彼女』という映画作品があって、あり方は結構構っているのですが、男性側からみたちょっと変わっている魅力的な女の子との恋愛がどうなるか、というのは気軽に接近できる仕方かなと思って。男性の考えを書くのは難しかったのですが、けっこうリサーチとか、周りの男性との会話を含めながら書きました。「彼女」の名前がないのは、私自身を含めて周りの恋愛とか社会での不公平を経験した女性たちの話はほぼ似ている、これは一人の話ではなくみんなの話になるという発想で、誰にもなれるという意図で名前を付けませんでした。

木村：寄せられた質問の中でスンジュンみたいな考え方は韓国の若者の中では多数派なのか、という質問があったのですがどうでしょうか。

ミン：実はこの小説を読んだ多数の韓国女性は、スンジュンみたいな人でも結構いい奴じゃない、という反応でした。なぜかというたとえばDVとか盗撮とかはしていない、とにかく優しい、一応…？

木村：だいたい期待値が低いんですね！

ミン：犯罪の域まで行っていない彼氏だから、これだと上位5%ぐらいみたいな。冗談っぽくそれを言うぐらい、今の韓国の女性たちが男性に感じるがっかりしている心がありまして…実は私はスンジュンはそこまで悪い人だと思っていないです。普通の良い教育を受けて、家父長制の強い地域の家族の息子としてあまり疑問を持たずに今までの人生を生きて来た人なんですね。ですからたぶんスンジュンみたいな考え方は結構大勢の男性が持っていると思いますし、それは悪意があるのではなく、自分が教育されてきた、男性としてまともな人になるためにはこう考えて、男性として要求されたことをやるのはいいいことなんだみたいな、そういう考え方をしていると思うので、スンジュンみたいな人はいまだに多いかもしれないです。

木村：加藤さんに翻訳の工夫や苦勞をお伺いしたいのですが、韓国と日本は似ているとはいっても文化的な違いがあると思います。苦勞した点をお聞かせください。

加藤：「メガル」などのいろんなフェミニズム用語がたくさん出て来たので注釈をつけるというのが大変でした。ミンさんに手伝ってもらいました。男性が主人公で、原著は「作者が男性かと思った」と言われるほどリアルな若い男性の口調で書かれているものなので、なるべく雰囲気を出そうとがんばりました。それから学生さんの感想にあったのですが、彼女のセリフが女性言葉、「～よ」といった役割語がないため、どちらのセリフなのかわからないぐらいだったという感想をいただいたのですが、そういう部分もフラットなというか、リアルな会話で使われるようなセリフの口調になるよう気を使って翻訳しました。

木村：翻訳において女性語を使うかは翻訳者の裁量が大きいですか。

加藤：そうですね。やっぱりどっちが話しているか

わかりやすくするためというのもあるのですが、日本語は役割語が発達しているの、いろんな意見がある部分なんですけど、やっぱりそのキャラクターが言いそうにないの。彼女が「～だわ」と話すことは絶対ないと思ったので。このキャラクターだったらこう話すだろうな、というのをイメージしながら訳しました。

韓国の中絶をめぐる現状

木村：次に中絶の問題について伺いたいと思います。この小説が出たあと墮胎罪への違憲判決が出たのですが、その後現在の韓国の状況はどうなったのでしょうか。

ミン：やっと墮胎罪が無くなったのですが、その後墮胎をできるようにするために法律を作らなければいけないのに、それが国会で進んでいなくて。今は墮胎罪はないけど、墮胎ができる法律はない、という状況です。最近あるメディアがこの問題について実態調査をしてみたところ、いまだにソウル市内でも墮胎をきちんと受けられるところがあまりなくて、前と同じ状態にとどまっています。新しく法律を作る必要があるのですが、韓国では墮胎の問題を女性の自分の体の決定権ではなく、赤ちゃんの命が優先だとかそういう考えを持っているキリスト教団体などの影響力も強いですし、女性の意見よりそういう政治の問題でなかなか進まない状況です。

木村：違憲判決は出たけれども、難しいという状況にあるわけですよね。日本では墮胎罪はあるものの、母体保護法で妊娠22週未満なら墮胎はできるのですが、とはいえ配偶者の同意が必要であるとか、結婚していない場合男性側の同意が必要ではないのに同意書を求める産婦人科医院が多く、日本も現実的に墮胎するのがなかなか難しい状況があります。韓国の場合は、それ以前にまずできないという点でもっと困難な状況にあります。レイプの場合墮胎できるということですが、これを証明するまでに時間が大変かかって現実的に難しいんですよ。

ミン：そうです。それがレイプだと証明するために警察とか検察とかが捜査してしまうと期間が長すぎて墮胎できるタイムリミットに間に合わなくなってしまいます。また前の墮胎罪の例外の一つに、遺伝的な障害がある場合墮胎できることに

なっていて、そういう点で差別的な法律でした。

木村：小説の中ではスンジョンの避妊・妊娠に対するのきな考え方と、女性が感じる妊娠することへの恐怖という温度差が描かれていましたが、小説を読んだ人には、この差が非常にグロテスクなものであることが今の話を聞いて分かってもらえるのではないかと思います。

ミン：最近ネットフリックスで『ヒヤマケンタロウの妊娠』という男性が妊娠できる世界観のドラマがあってそれがすごくおもしろかったですね。これを見れば男性の方にもそれをちょっと理解してもらえるようなドラマでした。みなさんぜひ見てください。

韓国のフェミニズムデモ

木村：韓国ではデモがよく行われているのですが、フェミニズムに関するデモはどれくらい行われているのでしょうか。

ミン：最近ではコロナのせいで大人数が集まるのが難しくして前よりはなと思うのですが、例えば数日前にある大学でキャンパス内で女子大学生が殺される事件²があって、江南駅の事件の時のようにポストイットが貼ることができる追悼の場が学内で作られたりしました。こういう事件があったとき、結構、行ったり集まったりするのを自然に行う文化がありまして、例えばフェミニズムのデモは、そういうこと起きなければいいのですが、フェミニストとして怒りを感じる判決や事件が起きると、韓国では女性団体や市民団体が多いので、そういう団体から何日何時どこに集まりますみたいな情報がSNSに出て、「じゃあ行こう」、みたいになります。

木村：日本ではフェミニズムのデモを見たことがない、知らないという感想がありました。日本では例えば毎月11日にフラワーデモというものを行っていて、性暴力を許さないというデモが、みなさん見たことないかもしれませんが行われています。

脱コルセット運動

木村：「彼女」の服装について補足しておきたいと思います。「彼女」はもともと女性らしい恰好をしていたのですが、再会した彼女はダボっとしたトレーナーやパンツにスニーカーなどボーイッシュな恰好をしていますね。それに対してスン

ジュンは昔のように女性らしい恰好をしてほしいと思っているのですが、これは脱コルセット運動³というものです。実践している方は多いのでしょうか。

ミン：確かに結構いると思います。特に女子大など多いですね。私はこの運動の前から髪が短くてそんなに化粧するタイプでもなかったのであまり変化はないのですが、周囲を見ると以前はヒールを履かないと出かけない友人もいました。私の大学時代はキャンパスで授業を聞くだけなのにみんなヒールを履いてくるような雰囲気でした。今の大学生を見るとスニーカーでバックパックを背負っている女子学生が多いですね。

木村：作中の結婚式のシーンで「彼女」がフェミニズム T シャツを着て行っていかたとスンジョンに言うシーンがあって、これについてドレスコードを破ろうとしている、と理解している感想があったのですが、ちょっと違いますよね、加藤さん。

加藤：はい。ちょっと補足が足りなかったかと思うのですが、韓国の結婚式は自分の彼女や友達と急に参加できるようなカジュアルなものだと注記したのですが、服装についても日本と違ってちょっとちゃんとした格好をしてくれば大丈夫で、日本より服装がカジュアルです。さすがに T シャツは「彼女」の冗談ですが、結局女性らしい恰好ではなかったですが、おしゃれをしてきた、という感じです。

木村：T シャツは OK ですか？

ミン：ジャケットを着ていれば OK ですかね？ 本当あまりこだわらないかんじです。

加藤：日本でいうオフィスカジュアルみたいな感じがほとんどですね。

性犯罪の話題に対する反応

木村：「彼女」は性犯罪のニュースをよく見ていて、その話しか話す内容はない、ということを行っているのですが、スンジョンは普通の日常話をしたいのに、そういう話をされるのは男はみな加害者予備軍と責められているようでつらい、などと言うシーンがあります。「彼女」は男性も一緒に怒って、このような社会でなくなるようにすればいいのに、と言うんですね。「彼女」の考えすごくわかるのですが、なかなか男性側ではそのような考えに至らない、すぐ「冤罪が」などと言うの

はなぜなんだろう、とちょっと思ったりします。
ミン：男性がそのような反応をするのは、たぶん、全ての男性がそうだというわけではないのに、という気持ちと、自分は何もできないことへのいら立ちがあって、すぐ「男みんながそうではないから」などと言うのかと思います。女性の気持ちに共感するのがまず必要だと思います。なぜか、ほかの男性の性犯罪などを非難すると自分が非難されているように感じる男性たちが結構いるように感じますが、フェミニストとして憤慨するときはその行為や発言だけが悪いということを理解して貰えれば、男性の方ももっと変な自己防衛をせずに会話できると思います。自分が経験した会話の中でもフェミニストとしてその行為や発言がおかしいと指摘しただけなのに、自分自身が攻撃されていると受け止められることがあって。そうじゃなくて、その行為や発言が悪いということを行っているだけなんだと、うまく伝えたいというも思います。

家父長制のプレッシャー・性的マイノリティ

木村：実家のある大邱でスンジョンの一族が集まって祖父の傘寿のお祝いをするシーンがあるのですが、30歳になって結婚していないスンジョンへのプレッシャーや、女性だけ宴会の準備をして男性陣はくつろいでいるとか、おしめ替えが上手くできない従兄が妻に文句を言われているのを見て、父や伯父さんたちが男の威信が地に落ちてると言ったり、非常に家父長的な描写がそこでされています。この中で育ったからあのような価値観になるんだな、と思わされる描写になっているのですが、この中で暮らしているスンジョンは決して幸せではないですよ。

ミン：そうですね。スンジョン自身も実はそれを感じていて、この章の最後にこのままここにとどまるのか、彼女のいる都会に所属するのか迷っているのですが、実は家父長制は女性に対してだけではなく、男性にもすごいプレッシャーをかけていて、これが無くなればお互いに楽になると考えていまして、その狙いでこの章を書きました。

木村：その中で50歳になる叔父さんが出てきまして、首都圏の大学で教員をしていてシングルライフを楽しんでいるのですが、結婚していないということだけで一族の中で立場がないという描写が

されています。「彼女」と電話した際に叔父さんのことを話すのですが、「彼女」は叔父さんがもしかしたら同性愛者かアセクシャルなのではないかという可能性を示唆するシーンがあります。それに対してスンジュンは非常に拒否的な反応をします。「教養ある現代人として同性愛が嫌だと堂々と言ってはまずい」と思っているものの、「彼女」の前で拒否的な反応を示してしまっ、もしかしたら自分の叔父さんでなければこういう否定的な反応は見せなかったのかなとも思いました。韓国社会の同性愛など性的マイノリティに対する見方はどのようなものでしょうか。

ミン：ちょうどソウルでコロナで3年ぶりになるクィアフェスティバルが行われることになったのですが、韓国でも多様なセクシュアリティの活動を行う人は多いです。ただ儒教社会であったということもあるのですが、キリスト教の影響が大きくて、同性愛に対して否定的な見方もいまだに強いです。例えば前の文在寅大統領の選挙時の討論会の中でいきなり候補たちの中で同性愛がテーマに上がって、あなたは同性愛に賛成ですか、という話を普通にしゃうんです。それで反対だということテレビで言うてしまうことがあって。その中で少数政党の(正義党党首である)女性の候補の沈相好さんが非常に強く反論してくれて、それが性的少数者たちにはすごく力になりました。このようにいまだにすごく偏見と言いますか、他人のセクシュアリティに賛成、反対ということ自体おかしいということにすら共感できない人が多くて。クィアフェスティバルをする際も書き込みする人は、「私は特に同性愛に反対ではないが、人に見えないところで密かにやってほしい」、みたいに書きこむんですよ。それは実は反対していることなのですが、まだ認識が足りなくて。スンジュンは友達同士でそういう話題になると「私は反対者ではないよ」と言いながら、心の中では嫌だと思っている普通の人だと思って書きました。

Me too をめぐる現状

木村：編集者の「彼女」が脱コルセットしたのは、会社の売りに多大な貢献をしている売れっ子作家からセクハラを受けているからなのですが、耐えきれなくなった「彼女」はついに出版社を辞めることとなります。セクハラを告発しようと

してもなかなか難しい様が描かれていましたが、男子学生からは「女性がそんなにセクハラを告発しづらいとは思わなかった」、女子学生からは「私だったら、自分さえ我慢すれば、と思ってしまうかも」という感想がありました。セクハラを告発しづらい状況は日韓とも今も変わらずあると思います。韓国では Me too は増えてきていますが、様々に課題があるのではないのでしょうか。

ミン：現役の検事が生放送で告発するとか、秘書が政治家を告発するとか、そういう方の行動はとても勇気があることだと評価される一方で、二次加害があつて。それを見て女性たちは複雑な気持ちになると思います。自分も被害を言いたいけれど、言ったら自分もあいつ二次加害に遭うんだということをもみんな見ているので。社会ではいろんな分野の Me too が活発になって、あつてはいけないことだと共感しているのですが、被害者個人個人に対してはやっぱり「あなたは本当に被害者なの」という疑問の眼を向けられることがあるので、それを想像すると、社会の雰囲気の中で(二次加害などで)自分が損するかもしれないことの方が多いため、いまだに難しいと思います。

女性が夜歩きできないこと

木村：「彼女」が夜遅くまで飲み歩くというシーンがありまして、スンジュンは危ないから早く帰らなよ、と思っっています。「彼女」は女性でも夜に心配なく出歩ける世の中になればいい、と言うのですが、感想でも、夜遅くまで出歩くなんて危ないことだと思っっているが、「彼女」の言うように夜出歩くのが危なくなれば問題ないのだから、「彼女」の言っていることは間違いじゃないなと思っった、という女子学生の感想がありました。ただそれを実現するのは難しさがありますよね。私自身大学の防犯WG担当で、ガイダンスで夜遅くならず早めに帰ろうねと学生に言うのですが、女子学生に特に強く注意喚起しなければいけないことに歯がゆさを感じます。危なくなれば、女性だって夜遅くまで出歩いて問題ないわけですから。このシーンに込めた意図などありますか？

ミン：確かに性犯罪が多いとか危ない現状があると思っいます。先に話した大学キャンパスで女子学生が殺された事件は、実は同じ学年の男子学生と一

緒にお酒を飲んで、レイプされて殺されたという事件なのですが、この事件について最初の書き込みで多かったのは、なぜそんな遅くまで男と酒を飲んだ？というものでした。典型的な二次被害なのですが、これは。普段女性に「遅くまで男と酒を飲むな」とアドバイスをしていた人だとこの事件を聞いてそんな風に考えてしまうのかな、と思います。現状危ないと認めるのは仕方ないと思うのですが、危ないのだから被害が起きたら女性が完全に責任を負うべき、という考え方は加害者の存在を消すことになると思っています。加害者が悪いのであって被害者は何も悪くないのではないかと、いうことを言いたくて、人によっては「彼女」の話は無理な話だと思うことはわかっていますが、このように書きました。

恋愛と結婚

木村：スンジュンの男友達の結婚式に出席し、スンジュンと「彼女」は決定的に対立して別れることとなります。最後に二人は一度再会し、スンジュンは「彼女」に「将来、旦那も子どももいなかったから寂しんじゃない？」と聞くのですが、「彼女」は「その代わりに、私がいるはず。たぶんね」と答えます。このシーンに勇気を貫くという感想が多いですね。やっと「彼女」に向き合ったスンジュンは、「彼女」が素敵な人間だったことにやっと気付く、という展開ですが、こういった展開に込めた意図は何かありますか？

ミン：最近ある記事で見たのですが、男性にとっては自分の幸せという方向性の中で、キャリアとか家族とか全部一致していて何の矛盾もない社会になっているのですが、女性に対しては矛盾していて、キャリアや恋愛、家庭や育児が矛盾していて、いつも難しさを感じるというのを読みました。韓国も日本も同じだと思うのですが、昔は「女性の幸せ」というのは、家庭を持って子供を産んで、それが女性として「正しい」幸せだと言う概念が一般的だったので、まだその影響はあると思います。実は私も30歳ぐらいのときに、作家というのは不安定な仕事ですから、結婚した方がいいのではないかと一瞬考えた時期がありまして…私みたいな若い人はそのような考えはないと思っていたのですが、一瞬つい考えてしまうことが、なんといいですか、社会のプレッシャー

という脅迫？みたいなものを必ず感じると思うと思います。「お前本当にひとりでもいいの？」みたいな。女性は、日本も韓国も同じなんですけど、給料の差がありまして。女性として経済的な難しさを感じる人は極めて多いですし、中年の女性にはいい職業がないという問題がありまして、このままでいいの？と脅迫されている感じですね。その中でも自分を守ることがとても大事、ということをお願いしたかったです。

木村：勇気づけられた人もたくさんいると思います。「彼女」は非婚を選択するのですが、恋愛前提社会の韓国ではなかなか理解されづらいのではないかと思います。韓国は初対面の人に「彼女／彼氏いるの？」と聞きますよね。日本では親しくならないと聞かないので、留学したとき本当にびっくりしました。ミンさんの第二作目の小説、日本では未翻訳ですが『私の完璧な彼氏と彼の恋人』という小説があります。これはオープンリレーションシップ、ポリアモリーとも言いますが1対1の恋愛ではない関係を描き、独占的恋愛と結婚制度へ疑問を投げかける作品というのですが、スンジュンは彼女を独占したい、所有したいと考えていて、それとは異なる話をお書きになった背景をお伺いしたいと思います。

ミン：『僕の狂ったフェミ彼女』は恋愛に関するフェミニストの難しさを描きたかった作品なのですが、主人公が男でしたので、「彼女」の感情は想像に任せる形になっていました。フェミニスト女性が恋愛に直面する際にどのような考えになるのか、心の行き先を繊細に描きたいなと思っていました。オープンリレーションシップは、人によってはすごく変だと思うことが多いと思うのですが、この話の一番重要なポイントは恋人が二人ということではなくて、相手を所有するのは恋なのか？という疑問です。韓国だとDVとか、女性が別れを切り出した際に殺されてしまう交際殺人が社会問題になっていて、それをしてしまう人の中に相手が自分のモノだという考えがあるから、こういうことが起こるのではないかと思います。人と人として、所有とかではなく、最初から自分たちにとって一番ふさわしい関係を話し合いながら作り上げられる関係というものはありえないのかなと思ったときに、オープンリレーションシップをやっている方々が、全部会話して、合意し

て、自分たちの関係を作っていることを知りまして。1対1関係でもやり方を見習うべきところがあると思って、フェミニストなど公平な恋愛をしたがる人たちには参考になるのではないかとあって、これを書きました。

木村：加藤さんはすでにお読みということですが、感想をお聞かせいただけますか？

加藤：今話があった、描こうとしたポイントがよく出ていて、彼氏／彼女ならこうしなければいけない、というような今までの恋愛の固定観念を壊すことに挑戦していて、1対1の恋愛でも相手を尊重してひとつひとつ話し合っただけで決めるというのは見習えることだし、共感しました。日本で出版したいと思い現在契約中です。

男女対立を乗り越えるために

木村：現在の韓国社会では、男性は兵役を課されるのは男性だけだということでも不満があり、女性は出産するとキャリアが断絶して再就職が困難になり、家事も育児も女性がやっているとどんどん苦しくなっていくという状況で、出生率が去年ついに0.81となるほど出産しなくなっています。このような深刻な男女対立を乗り越えるために、どのような試みがされているのでしょうか？

ミン：出生率や結婚率は今すごく低くて、若い男女の中でお互い理解できない状況になってすごく葛藤があります。韓国政府では少子化対策として出産したらお金をあげるといったレベルのことしか話が出ていなくて、そういう問題じゃないんだということを理解してほしいですね。女性が育児と仕事を両立できるように、社会も家庭も、文化自体が変わらなるとなかなか出生率は上がらないんだということを女性たちはみんな知っていますが、なかなか実現しなくて。フェミニストだからこう考えるのではなく、社会全体がもうちょっとフェミニズム的な考え方を持って、女性の困難を解決することが社会がいい方向に行くためのすごく重要なポイントだと共感したら、葛藤や社会問題が解決すると思います。

寄せられた質問への回答

木村：寄せられた質問の中で今まで触れられていない質問をしたいのですが、まず「韓国でのフェミニストの男性と女性から見たフェミニズムとはど

のようなものですか。またフェミニストではない男性と女性はフェミニズムをどのように捉えていますか。」という質問です。韓国では男性のフェミニストによる本も出ていますね。

ミン：「フェミニズム」は「フェミ」というのは女性を指しているから、「イコリズム」や「ヒューマニズム」を使うのが良いのではないかと、という話題はよく出ます。フェミニズムがやろうとしているのは男女は平等だという考え方、男女が平等な社会を作りたいという方向性の思想ですので、イコリズムやヒューマニズムがそんなに違う方向性ではないことはわかっているのですが、今の社会は女性の立場が悪いということがあって、女性の立場をよくするべきだ、という意味が「フェミニズム」という単語にはあるので、単語を変えるのは良くないと思っています。男性のフェミニストも当然います。男女が平等な社会を作るというのは極めて常識的な考えで、男性にとっても有利というか、さっきも話したように女性の立場が良くなると社会全体も良くなるので、男性にも極めて意味がある思想だと思いますし、共感する男性も少しずつ増えています。ただ韓国ではフェミニズムに対する反感がすごく高まっていて、バックラッシュといえますか反動がすごくある状況です。フェミニストたちの要求に対し、自分たちのものを奪っているのだと勘違いしている男性が多いと思います。韓国の場合兵役の問題があって、若い男性は1年半ぐらい軍隊に行かなければいけないのに女性は行かなくていいので、その面で見たら女性の方が優遇されているように思われて、逆差別だという意識が広がっています。またフェミニズムは女性のためだけの、女性の優越を主張しているという誤解がありまして。それで『僕の狂ったフェミ彼女』のウェブトゥーンが公開されたときに、「この人はフェミニストだ」ということだけでネットで攻撃を受けて警察に告発することになりました。社会の認識が変わらなければいけないと思います。

木村：次に、韓国ならではのジェンダー観だと思事例や、日本と比較して何か違うと思うことはありますか。

ミン：あんまり変わらないと思います。ただ韓国は兵役がありますので、それに対する男性の心は、日本の男性とはすごく違うと思います。

木村：次に、ジェンダーに関心を持っていてフェミニズム小説をよく読んでいるが、自分はゴスロリが好きで、「女性らしい格好」を強要されるからではなく、かわいく好きだから着ているのに、友達にそれは変ではないかと言われるが、「女性らしい格好」をしたフェミニストはおかしいと思えますか、という質問です。

ミン：脱コルセットがフェミニストの中で最初に盛んになったとき、化粧する女性はフェミニストではないでしょ、みたいな話がありました。それが新しいプレッシャーになるのはよくないなと思います。脱コルセットの「コルセット」は男性が喜ぶような、という前提だと思います。私が特に髪をショートカットにしたり化粧をしなかったのは楽だから、私が満足して好きだからなんです。そういう観点で見ると、自分の好きなようにするというのは、フェミニズムの問題だけではなくすごく大事だと思いますし、脱コルセット自体が新しいプレッシャーになるのはよくないと個人的には思っています。

木村：最後の質問ですが、「ミン・ジヒョンさんの考える理想の社会とは何ですか」というすごく大きな質問が来ています。

ミン：さっきフェミニズムの目的として男女平等な社会を作るといことだと述べましたが、全てのマイノリティだれでも差別されることのない平等な社会というのがいちばん理想だと思います。これを聞くとみんな当たり前だと思ってしまうのですが、意外と個人の中にはいろんな差別・偏見があって、私も自分の中にある偏見などを発見したりします。本当に平等な社会を築くのは極めて難しいですし、誰でも自分の中で矛盾を持っていることを知った上で、理解し合い対話を続けられる社会がいいのではないかと思います。難しいことですが。

映画業界における性暴力予防

木村：最後に、映画業界についてお話を伺いたいのですが、日本では今年になって映画界の性暴力がクローズアップされ、業界改善のため韓国を先行事例として参考しているようです。ミンさんは韓国映画性平等センターの性暴力予防講師をされています。映画だけでなく、エンターテインメントの世界全体の中でどんどんジェンダー平等意識が

アップデートされているとおもうのですが、今の韓国の状況を聞かせてください。

ミン：韓国映画性平等センターというのは国の支援で作ったものですので、国がこういうものを作った、ということがとても業界に影響を与えていると感じます。私たちがやっているものの一つとして現場スタッフたちに対して性暴力を防ぐ教育を行っているのですが、国からちょっとでも支援を貰う現場はこの教育を受けるということが必須になっているので、最近はこのような教育を受けるのは必ずやること、という認識が広がっています。女性スタッフを増やすとか、映画の中の描写をもっといいように変えようという教育も含めているので、映画界全体の意識を高めるための活動になっていると思います。韓国の Me too が始まったのは芸術業界からで、いろんな告発が報道された時、業界や国全体で衝撃と共に、これはあってはならないことだという共感がある程度できたと思います。また業界の処罰判断が早くなって、加害者はしばらく仕事ができないというケースが何件もありましたので、それがすごくプレッシャーになっているようです。いい方向に雰囲気が変化していると思います。まだ完璧ではないのですが、こういう努力をオフィシャルにやることが重要だと思いますので、日本でもこういう動きがあったらいいなと思っています。

木村：日本も変わってもらいたいと思います。

注

- 1 もともとは「メガリア」利用者のことを指す語だが、現在はフェミニストを一括りにして揶揄する呼称として使用される。
- 2 仁荷大学のキャンパス内で男子学生から性的暴行を受けた女子学生が3階から転落して亡くなった事件。
- 3 男性が喜ぶような、男性中心的な価値観を「コルセット」と呼び、そこから脱する運動。化粧をやめたり、髪をショートカットにする、ブラジャーを付けないなど、日常生活から「コルセット」を脱ぎ捨てようとして行動する。